

ローザンヌの聴衆の
心を掴んだ
大村博美の蝶々さん

R



昨年初来日を果たしたローザンヌ歌劇場は今も日本ブームのようである。現在残された伝統的な日本の写真がちりばめられたプログラムが用意され、舞台上には日本家屋のセットが開演前から日本情緒を醸し出している。

オソンスの指揮は、冒頭ではメトロノーム的に感じられたものの、心地よく全体を調和させていた。ピンカートン役のマラーターが風邪で、頭声の響きだけでなんとか乗り切ったが、歌う箇所を省いたり、オクターブ下げて歌ったりで、全体のテンションが下がってしまったのは否めない。GPで素晴らしい歌唱を聴かせたというだけに、残念だった。

しかし、シャープレス役のオデナ、ススキの重松、ゴローのカンらがしっかり支え、可憐で健気な大村博美の蝶々さんは、聴衆の心を掴んでいた。声の線は細めだが、胸声と頭声のチェンジを感じさせないテクニックは稀少で、15歳の少女としてリア



2月22日、25日、27日、3月1日にローザンヌ歌劇場にて上演

ルに歌えていた。日本人として恥ずかしくない《蝶々夫人》を観られるのは、本当に嬉しい。取材・文：中東生

